

<様式>

学 校 名	山形市立第三小学校 山形市宮町五丁目7番58号 TEL 023-622-0653 FAX 023-633-9320	校 長	佐藤 昌彦
		研究主任	志田 雄
研究 主 題	子どもの粘り強さと自己調整力を育む（2年次） ～ 見方・考え方を軸にした授業づくりを通して ～		
研究 主 題 設 定 の 理 由	<p>これから先の時代は、「厳しい挑戦の時代」である。一人一人の多様性を原動力とし、新たな価値を見出していくことが必要となってくる。子どもたちには、こうした変化を乗り越え、高い志や意欲をもつ自立した人間として、他者と協働しながら価値の創造に挑み、未来を切り拓いていく力を身に付けることが求められる。新しい時代を生きる上で必要な資質・能力を確実に育てていくためには、「何を教えるか」だけでなく、「どのように学ぶか」という、学びの質や深まりを重視することが必要となってくる。さらに、課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習やそのための指導方法を充実させていく必要がある。「生きる力」や「確かな学力」は21世紀の社会を生きる上で必要な力とされ、その育成が求められている。</p> <p>そのような社会的背景とともに本校では、令和4年度から、「子どもの粘り強さと自己調整力を育む～見方・考え方を軸にした授業づくり～」を研究主題として掲げ学校研究に取り組んできた。見方・考え方を働かせるための手立てや、「粘り強さ」と「自己調整力」を高めるための手立てを明確にし、授業研究会を行い、事後研究会等においては、子どもの具体的な姿をもとに話し合い、実践を重ねてきた。年度末の研究全体会で、「粘り強さ」とは子どもが自分事として捉えた課題に取り組み解決していこうとする際、自分の持っている知識や技能を総動員させる力だということ「自己調整力」とは、何としまも課題を解決するために他者と意見を交流させる、自分なりに調べる、助けを求める、これまでの経験を生かすなどの力だということ、そして、「粘り強さ」と「自己調整力」は相乗効果で伸びてくるものだという認識を共有した。</p> <p>そこでわたしたちは、一人一人の子どもが自己肯定感をもち、身に付けてきた資質や能力を発揮しながら、自らの願いを実現していくことができるように育てていきたいと考えた。子どもたちは、人や自然、地域とかかわりながら学び、仲間とともに学ぶ中で自分を見つめなおし、さらに高まっていこうとすることができる。互いに仲間を尊重し合う関係を育みながら、子ども一人一人が自信をもち、自分の願いの実現に向かって追究を続け、学んだことを生活に生かしてほしいと考え、本テーマを設定した。</p>		
研究 の 目 標	<p>学校全体として、以下の4つを「子どもを育てる4つの柱」にし、校内研究を中核としてカリキュラム全体で育む。</p> <p>「協働性」 かかわりながら ともに学ぶ子ども</p> <p>○ 人は対象（人・もの・こと）とのかかわりを通して多くの知識を得たり、経験を積んだりしながら確かな力を身に付けていく。対象とかかわりながら、ともに課題解決に向かうことができる子どもを育てていきたい。</p> <p>「主体性」 自分の願いをもち 学び続ける子ども</p> <p>○ 子どもたちが学習問題や課題に対して解決の方法やねらいを明らかにし、願いや思いをもって進んで学ぶ姿をめざしていきたい。その過程や活動のあとに、新たな課題を見付け学び続けていく子どもを育てていきたい。</p> <p>「創造性」 学んだことを 生かそうとする子ども</p> <p>○ 学んだこととは、獲得した知識や技能（知的な側面）だけでなく、学習から得た喜びや自信など（情意的な側面）、さらには問題を解決するための「見方や考え方」、「学び方」も含まれる。これらを総動員して直面する問題を解決しようとする子どもを育てていきたい。</p> <p>「持続性」 日々の継続により自信をもって進もうとする子ども</p> <p>○ 学級、学年という集団、学校という空間を越えて、更に広く自分たちの学びを発信・提案する楽しさを味わったり、日々の学びを通して自信をもち、社会のニーズに合った活動に取り組むことができる子どもを育てていきたい。</p>		

研究の仮説	<p>「主体性」「主体的に学習に取り組む態度」の評価については、知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりすることに向けた粘り強い取り組みを行おうとする側面と、粘り強い取り組みを行う中で、自らの学習を調整しようとする2つの側面からの評価が求められる。本校の児童は、全国学力調査の質問紙の回答を見ると、算数に対する主体性が特に低く、「役に立つ」「おもしろい」と感じている児童が少ないことがわかる。そのため、児童が算数ならではの見方・考え方を働かせて学習に取り組み、「算数は普段の生活の中にたくさん活用されている」「おもしろい」と感じられれば、より粘り強く学習に取り組もうとする態度が育っていくのではないかと考える。</p>
研究の内容	<p>① 資質・能力の確認 ⇒ 授業のゴールイメージをもつ この授業で子どもは何かできるようになるか、授業のゴールイメージを教師はもっているだろうか。子どもにどんな資質・能力が身に付いていて、そして授業を終えて、どんな資質・能力が高まっていればいいかを、教師は描いているだろうか。授業のゴールを能力ベースで教師が描くことが、授業作りのスタートである。そのためにも、各教科との関連や系統性を持って授業を進めていきたい。</p> <p>② 各教科ならではの学習活動 ⇒ 子どもがどのように学んでいくか 学びのゴールに向かうために、子どもはどのように学んでいくか（子どもの学びの文脈）を考えていくことが重要である。国語の授業であれば「言語活動」、算数であれば「数学的活動」と、各教科にはその教科ならではの学習活動がある。教師は、授業のゴールイメージを、その教科ならではの学習活動にのせて、授業を作っていくことが重要である。その際、1単位時間をどうするかではなく、能力ベースの単元デザインをどう描いていくかを大事にしていきたい。</p> <p>③ 見方・考え方を働かせる ⇒ 各教科ならではの対象との関わりの仕方 見方・考え方とは、各教科ならではの対象への目の付け所（見方）や各教科らしい追究姿勢（考え方）のことである。 子どもは就学時にすでに、曖昧な知識だったり素朴概念と呼ばれる膨大な知識だったりをもっている。少なくとも、小学校で教える事柄であれば、子どもはそれに関わる何かしらの知識や経験をもっている。つまり、各教科の見方・考え方の「タネ」を子どもはすでに持っている。 その子どもがもっている「いい線はいつているが、不正確であったり断片的であったり直観的であったりする『タネ』」を、各教科ならではの対象とのお付き合いの仕方（＝見方・考え方）に沿って、洗練したり統合したりしていくことが、見方・考え方を働かせた学びである。そして、洗練させたり、統合していけるよう促したりすることこそが、教師の役割である。教師が漫然と指導していたら、子どもの見方・考え方を磨くことはできない。よって、授業作りでは、どうすれば、子どもの見方・考え方を働かせることができるのかを考えることが重要である。</p>
研究の方法	<p>本研究では、①指導案作成－②事前研－③本時の参観－④事後研－⑤実践記録の5つを1つのパッケージと捉え、実践していく。そのために、5つ全てのプロセスで、子どもの粘り強さと自己調整力を育む授業作りになっているかどうか、授業づくりの3つの視点で、話し合い、実践し、改善していく。</p> <p>①指導案作成 子どもの「粘り強さ」を高められるように、「見方・考え方の理解による教科への知的関心（算数っておもしろい!）」と「見方・考え方の活用による学習有用感（この学習は役に立つ!）」が高まることを目指す。そのために、 ①その単元をなぜ学ぶのか（Why）を学習指導要領で確認する。 ②何を学ぶのか（What）を学習指導要領で確認し、この学習で学ぶ見方・考え方がどこで（他単元・他教科・実生活）役に立つのかを設定する。 ③どのように学ぶか（How）について、算数ならではの学習活動（数学的活動）を確認し、授業の流れを組み立てる。 ④数学的見方・考え方を働かせるための教師の具体的な手立てについて記載する。 子どもの「自己調整力」を高められるように、「メタ認知」「計画力」「調整力」が高まることを目指す。そのために、単元のはじめに単元計画を子どもと作る（または子どもに単元計画を提示する）。また、単元のおわりに単元を終えてのふりかえりをする（または単元で学んだ見方・考え方がどのように活用できるのかを教師が明示する）</p> <p>②事前研 授業者が、クラスや個々の実態をもとに立案した指導案をもとに、職員同士が協働的に授業づくりに参画するようにする。特に、指導案作成の項目で述べた①～④について、児童の実態を第一に、授業者の思いに寄り添いながら考慮し検討していく。</p> <p>③本時の参観 子どもの「粘り強さ」と「自己調整力」が高まっているかどうかを参観する。 そのために、「見方・考え方の理解による教科への知的関心（算数っておもしろい!）」や「この学習で学</p>

	<p>ぶ見方・考え方がどこで（他単元・他教科・実生活）役に立つのか」を感じられる授業になっているかに注目する。</p> <p>具体的には・・・</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本時で目指す資質・能力は、本当にそれでよいのかどうかに注目する。 ・算数ならではの学習活動（数学的活動）に沿った授業の流れになっているかに注目する。 ・教師の具体的な手立てが、その教科の見方・考え方を働かせるための手立てになっているかどうか注目する。 <p>④事後研</p> <p>授業で現れた実際の児童の姿（発言、つぶやき、学習へ向かう姿勢など）から、ねらいに迫れたかを、職員で検討していく。</p> <p>職員が授業参観からとらえた児童の良さ等、小集団によるワークショップ形式などを取り入れ、授業をふり返っていく。また、その小グループで行われた話し合いを見える化（可視化）し、成果と課題を明確にしていく。そのことで、研究の積み上げがわかるようにしていく。</p> <p>⑤実践記録</p> <p>指導案作成－②事前研－③本時の参観－④事後研のプロセスを通して、子どもの「粘り強さ」と「自己調整力」が高まったかどうかを振り返る。</p> <p>そのために、自分の授業づくりを3つの視点で振り返る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の設定した「目指す資質・能力」は、「見方・考え方の理解による教科への知的関心（算数っておもしろい!）」や「見方・考え方の活用による学習有用感（この学習は役に立つ!）」が高まることにつながっていたか。 ・自分の実践が、数学的活動に沿った授業の流れになっていたかどうか。 ・自分の考えた具体的な手立てが、その教科の見方・考え方を働かせるための手立てになっていたかどうか。
<p>研 究 の 計 画</p>	<p>校内の全体研 4回 学年部研 全ての担任</p>